

わがまち歴史散歩

近世池田村の庄屋・年寄

○「村」のイメージ

「江戸時代、村には庄屋とか年寄とかいう役人がいましたが、どんな人なのでしょう。」こう質問されたらどう答えますか。

そもそも、この人たちについて考えたことがない、いたことさえ知らないという人も多いのでは。

ありきたりな時代劇ドラマでは百姓も庄屋も、年寄も、滅多に見かけません。ときどきは出てきますが、その多くのイメージは、年をとり、顔にはしわ、見栄えのない着物姿で、領主の怒りを気にする哀れな農民といったところでしょうか。主人公の武士たちの引立役ですね。

NHKの大河ドラマでも今まで主役になった人はいません。ただ、今年の渋沢栄一は例外かも。ここでは、新しい「お百姓」のイメージがいろいろと沸いてきます。もちろん主人公は農民です。しかし、農作業では、米よりも藍の生産や蚕の飼育の方が中心。しかも買い付けにも心を砕いていて、半分以上商人ですね。視野も広いです。本当のところ、百姓って、どっちのイメージなのでしょう。

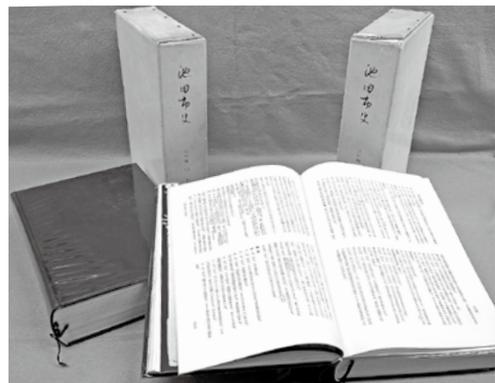
○池田村の庄屋・年寄

ところで、江戸時代には池田村も領主に支配され、年貢を払い続ける村でした。村ですから庄屋や年寄などといった村役人もおり、彼らは多くの百姓の上に立って領主の指示を受けていたのです。

さて、村だとすると当然、庄屋のくらしは農業中心、もちろん年貢のことで心は占められていた、と考えるのが普通でしょう。もともと、池田村は5つの株に分けられ、5人ずつ庄屋・年寄などがいたといえますから、少しややこしいですね。そこで、この5株のことはちよつと脇に置いておきましょう。そうすると、どんな人が庄屋や年寄役を務めていたのか、気になってきます。

○伊居太神社日記の衝撃

江戸時代、伊居太神社Ⅱ穴織宮の宮司は代々日記を書き続けてきました。『池田市史』史料編②③はそれを翻刻した活字本で、B4版全2076ページという大冊となっています。代々の宮司のなかでも、文化6年(1809)(9月の就任から天保10年(1839)末の引退まで31年余にわたって書き続けたのは秦上総定興です。その



伊居太神社日記を所収した『池田市史』史料編②と③

分量は833ページ。一人の人物が記した日記としては日本有数の記述量ではないでしょうか。

定興が宮司のとき、すなわち文政3年(1820)12月のことですが、日記には定興の身内と思われる勝左衛門(幼名伝之介)が推されて中池田村の庄屋に就任したと書かれているのです。もちろん、伊居太神社は、池田村のみならず、広く周辺地域からも尊崇された権威ある神社です。年貢の対象地にはならず、宮司も百姓の身分とは違っていました。そこで思うのですが、なぜ、宮司の身内が庄屋になれたのでしょうか。

実は、日記をめくっていくと、定興は当時池田一の造り酒屋で

あった大和屋の一統に属する商家Ⅱ通称大和屋勝左衛門であったことが分かります。それが、文化6年9月に宮司家である河村家の跡を取ったのです。文政3年に庄屋となった勝左衛門は宮司の身内と思われず、定興が宮司になる前の勝左衛門を襲名しており、当然大和屋に関わる人物とも見做されていたでしょう。「中池田村庄屋勝左衛門」の名は、このあと各種の史料に出てきます。

○商人が庄屋・年寄に

そういえば、この時期の池田村の庄屋の名前には、麴屋小兵衛とか豊嶋屋六兵衛など、商家としての屋号をもっている人が大勢います。ただし、庄屋として登場するときには屋号は書かれていません。

池田村の庄屋・年寄で農業を本業とする者は少なかったと考えるべきでしょう。一般の村々とは異なり商人を本態とする人びとが幕府や近衛家といった領主の指示を受けて、毎年多額の年貢を集め、納める仕事をしていたので、在郷町であった池田村の特質はここにあったと考えるべきでしょう。

(市史編纂委員会委員長・小田康徳)
◆問い合わせは生涯学習推進課市史編纂 ☎754・6674